

琉球大学学術リポジトリ

講読を通じた異文化理解 (その一)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-03 キーワード (Ja): 異文化理解, インターコース, 相互干渉型適応支援 キーワード (En): crosscultural understanding, intercourse, supporting adaptation through interaction 作成者: 石原, 嘉人, Ishihara, Yoshihito メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6570

講読を通じての異文化理解（その一）

石原嘉人

要 旨

さまざまな文化的背景や学習目標を持つ上級レベルの講読クラスにおいて、テキストは共通の関心事である「日本文化」を扱うことが少なくない。このことは、文化的な摩擦を事前に回避するという名目で、結果として一方的な同化を働きかけてしまう危険性を常に含んでいる。我々は「日本文化」を講読の授業で扱う際に、このことに十分に注意を払わなければならない。

小論では、異文化を画一的、固定的なものとして学ぶのではなく、多角的且つ柔軟に理解する方略を身につけられるような講読のあり方を、実践に基づいて追求した。このことは、沖縄を留学先に選んだことの意義を確認するプロセスともなりうる。日本と沖縄の現状を対比させることで文化の多様性を理解し、その延長として各受講生の出身地域について書かれたテキストを批判的に読むことに繋げられるからである。

こういった内容の文章を読むことは、異文化環境のさなかにある学習者にとって自らの体験を振り返りつつ参照し、それを日本語によって言語化することを意味する。そのため、かなり難易度の高い文章であっても、強い関心を持って取り組み、理解することが可能となる。

キーワード：異文化理解、インターコース、相互干渉型適応支援

0. はじめに

大学等での日本語教育の現場において、初級レベルで文単位の理解を求め、中級レベルで読解練習を行ない、その次の段階として生の日本語テキストを講読する、ということはごく標準的なステップであると言えよう。

中級レベルの読解練習の場合、指示された通りに要約したり本文中から質問の答えを探し出したりすることが多いため、テキストには文意の明解さや簡潔さが求められる。また、長さの面においても一定の配慮が必要である。従って、この段階では専門性や内容の深さを優先させることは難しい。多くの場合、この段階では学習者の日本

語習得段階に沿って難易度を調整した教材が使用される。

一方、その先の段階である「講読」の場合は、手が増えられていない生教材を用いることが可能であり、教材選定の際の選択肢が広がる。それは、教材選定に際して担当教官の力量が問われることを意味する。「その教材をどのように活用するのか」という教える側の意図がしっかりしていないと、漫然と読み進むだけの退屈な授業になりかねないからである。

受講者の専門分野が特定されていれば、その分野に関連するテキストを選べば良いのであるが、様々な専門分野の学生が受講している場合はそうもいかない。必然的に、多くの学生が関心を寄せていると思われる「日本の文化を紹介する」タイプの文章が多くなってくる。そのこと自体は問題ではないが、安易に「日本人はこのような価値観を持っている」「日本の慣習はこのようになっている」というかたちで紹介することは戒められなければならない。なぜなら、カルチャー・ステレオタイプを再生産し、相互理解を阻む結果を生み出す危険性を持つからである。さらに言えば、ドミナントな文化を一元的に紹介することは、集団内の異質性を切り捨てて斉一性を強調することに繋がりやすく、異質性を有するものにとって「価値観の押しつけ」と化してしまう恐れを常に孕んでいる。このことは、決して忘れてはならないことである⁽¹⁾。

筆者は、2002年度から担当している琉球大学の共通教育科目「日本語Ⅴ」（前期）、「日本語Ⅵ」（後期）の授業において、「文化のステレオタイプ化」や「自文化の押しつけ」を避け、他者からのまなざしを共有することによって異文化接触の際に柔軟な思考が展開できるような講読のあり方を目指している。そうすることによって、日本語による記述の内容をより深く理解することが可能になる、と期待してのことである。小論では、そのうちの「日本語Ⅴ」で扱った教材について、実際の授業の経過に沿う形でその内容を振り返る。

1. 教材選定

受講生の多くは県費留学生や科目等履修生であり、専門も様々である。アジア出身者が多く見られるが、特定の国や地域に集中しているわけではない。具体的には、02年度前期は中国三名、タイ二名、韓国とインドネシアがそれぞれ一名で、03年度前期は中国五名、韓国四名、タイ二名、台湾、シンガポール、ペルー、ドイツが各一名であった。

このように専門や出身地は様々であるが、自ら望んで越境し日々異文化の中に身を

置いている点においては一致する。また、日本に対する関心の一つに「近代化を積極的に受け入れ、推進した国」であること、しかもそれが「欧米とは異なる近代化モデルである」ことが挙げられる点も、ある程度共通の認識として認められる。

そこで、この科目で扱う教材を選ぶ際には、「異文化」、「越境」、「近代的自我」というテーマに沿ったものに限定した。結果として、02年度前期日本語Vで使用したテキストは、

- (1) 「ヤマトンチュから見たオキナワ」(評論)
- (2) 「ケナリも花、サクラも花」(随筆)
- (3) 「アジア定住」(インタビュー)
- (4) 「中国てなもんや商社」(娯楽小説)
- (5) 「カルティニの風景」(評伝)
- (6) 「縁切り神社」(小説)

であった。

まだ学生と対面していない時点では、多様な文体に馴れさせるために、評論、随筆、小説の(1)(2)(6)を準備していた。(3)(4)(5)は、履修した学生の背景に合わせて、開講後に選択したものである。(3)(4)(5)を加えたのは、それぞれが受講生の出身地に関係のある内容を含んでいることが理由である。具体的には、(3)タイで暮らす日本人へのインタビュー、(4)対中国ビジネスの経験を元にした娯楽小説、(5)インドネシア近代化の象徴的女性の評伝、である。(2)は韓国を題材にしており、これで、この学期の受講生の出身国をひとつおとり押さえたことになる。

異文化を「国」単位で語ることについては、倉地(1998:p.16)で指摘されているとおり、じゅうぶんに留意しなければならない問題である。しかし、とりあえずの単位として共有できる枠組みがなければ、題材を選択するために指標を見つけることができない。この講義では、可能な限り受講者が「日本語で語られている内容に関して、当事者として印象や感想、あるいは反論等を述べる機会を与える」という目的に沿って、それぞれの受講生の出身国に関わる文章を選んだのである。それは、学生たちが自分の体験や実感を引き合いにしながら読み進め、感想を述べ合いながら「書かれていること」と「知っていること」のギャップを確認し、意識化するためのプロセスとして、差し当たって妥当であろうとの判断に基づいている。もちろん、国単位で文化の違いを印象づけることのないよう、最大限の配慮が必要だったことは言うまでもない。

03年度は学生の出身者に合わせて、(4)(5)の代わりに「化粧するアジア---華人都市の消費事情」「ペルー日系人の二十世紀」、「大阪ウチナーンチュ」、「ドイツの不便、日本の便利」を使用した。

2. 越境感覚を意識化するために

上記テキストを読みといていく上で最優先に目指したのは、「文化の多様性を捉え、相対化する視点」である。沖縄という地の利が、ここでは生かされる。

まず、(1)「ヤマトンチュから見たオキナワ」について。この文章は、「日本」があたかも均一な文化を有する国であるかのごとき先入観---「日本は」「日本では」という言説によって容易に形成されうる誤解---から脱却し、自分達が日常生活の中で感じ取る現実と、抽象的な言説としての「日本」とを区別して考える視座を与えるものである。表題にもある「ヤマトンチュ」という言葉のニュアンス⁽²⁾を知れば、教科書的な言説だけでは見落としてしまいがちな多様性がこの国に存在することを実感するだろうし、「沖縄」ではなく「オキナワ」と表記することにこだわる筆者の感性は、決して「日本にある47の都道府県の一つ」におさまらないオキナワの独自性を啓発する。以下、要点となる部分をいくつか挙げ、そこから留学生が獲得するであろう新たな視点を概観する。

このテキストでは、観光ツアーに代表される「表玄関から入るオキナワ」と、この島に生活の場を築くような接し方「裏口から入るオキナワ」の、両極端の典型的なアプローチを紹介した上で、

表玄関から入るオキナワは、どこまでいっても本土が「オキナワらしく」演出したオキナワだ。ほんもののオキナワには出会えない。

と、断定する。一方、裏口から入るオキナワについては、「門中（ムンチュー）」「トートーマー」「ユタ」といった生活に密着した独自の文化を引き合いにしつつ、

オキナワの魅力は、手探りで奥に行けばゆくほど、見知らぬ景色が開けるといふ重層性と多様性だろう。光が闇に暗転したかと思うと、その奥にまた光が見えたりする。

と、容易に表象されえない実態を指摘する。たとえば公式な統計数値で最低とされる失業率や離婚率の高さを「それでも平気でやっていける受け皿がある」と指摘し、統計数値では捉え切れない実態に触れる。また、東京を中心にするると辺境に位置づけられてしまうオキナワを、日本からインドネシアまでをひとつながりとした「ヤポネシア」の中心部として位置づけた上で、

どんづまりの印象を与えるオモテから、どんな荒唐無稽なシナリオでも現実味を持ってしまおうウラの可能性まで、さまざまな想像を刺激する。そして、ヤマトンチュにとっては、オキナワほど日本とは何か、を考えさせてくれるところはない。

と、総括する。

こうした思考をなぞっていくことで、留学生たちは相対的な視点と物事を両面から見る感覚を養うことになる。このことは、きっと、日本だけでなく自分の国についての認識を深める結果に繋がるであろう。東京を中心として語られる日本と自分が暮らしているオキナワとのギャップを感じ取ることで、自国を描写するに際して教科書的な記述---典型としては、国土面積や人口等の公式統計で自国を語ることに留まるのではなく、自分の生まれ育った地域で実感したことを自分の言葉で語りはじめる契機となれば、このテキストを読んだ成果があったと、ひとまずは言っているであろう。

3. 相互理解とインターコース

3-1 相互理解

(2)「ケナリも花、サクラも花」では、著者（鷺沢萌）を紹介した時点で「民族的アイデンティティの自明さ」に疑問を投げかけることになる。鷺沢萌は18才の時に作家としてデビューしたのち、父方の祖母が韓国人であったことを知り、それをきっかけに韓国への語学留学を果たす。それは、若くして死別した父親との関係を見つめなおす旅でもあるのだが、日本人として自己形成した彼女にとって、留学先で出会う異文化としての韓国も、韓国におけるマイノリティ仲間である在日韓国人の友人たちとの交流も、「相互理解」という聞こえの良い一般論には収まりきらない微妙さを持つことになる。

まず、エッセイの背景にある日本と韓国の歴史、特に在日コリアンのアイデンティティ形成について解説しなければならない。少なくとも、鷺沢萌の父親が自分の民族

的出自を隠し続けてきた理由が理解できる程度には、日本における民族問題や差別の実情を説明する必要がある。ここでは、最低限の歴史的事由の解説と筆者が関西に住んでいた時に知り合った友人の事例を、特に「本名を名乗るかどうか」という点を中心に解説し、併せて日本国内におけるマイノリティとしてのアイヌ民族や沖縄出身者のアイデンティティの問題にも触れた。

こういった解説を加えた後、受講者に「鷺沢さんは在日コリアンだと思うか、それとも日本人だと思うか？」と問うてみると、大半が「決めかねる」という反応であった。

更に、教材として取り上げた箇所とは別の章で紹介されたエピソード（タクシーの運転手から「僑胞でしょ」と断定されてまごついたこと、韓国の雑誌のインタビュアーが彼女を類型的な枠にはめようとしたこと等、自分を理解してもらえなかった苦い体験）を口頭で紹介した後で、鷺沢が出会った一人の女性について記述した箇所を精読させる。

このテキストにはその女性がいかに素敵な人物であるかが描写され、二人の心が暖かく通いあうエピソードが紹介されるのであるが、その直後に、

わたしはこの一件を土台にして、というわけで相互理解ってものはね、とか、お互いの文化に敬意を払うっていうのはね、とか言うつもりはない。全然ない。そうなのだ、互理解なんてくそくらえなのだ。

という、いささか過激な述懐が続く。

この部分を正しく理解することは、そうとうな日本語読解力を持つ留学生にも難しいようである。最大の理由は、字句の難しさではなく、ほとんどの留学生が「相互理解は良いこと、必要なことである」という刷り込みを内在化させていることであろう。

講義では、もちろん「くそくらえ」という言葉の意味とニュアンスを説明するのであるが、字義通りの解釈が明確になればなるほど、学生たちの顔に困惑の表情が浮かんでくる。最大公約数の意見は、「筆者は誤解や偏見に苦しんだ後で、やっと相互理解が可能な相手に出会ったところなのだ。相互理解の素晴らしさを讃えるべきではないのか？」といったところであろう。

3-2 コミュニケーションとインターコース

この問題を整理する補助線として、「コミュニケーション」と「インターコース」という二つの用語を導入した。すなわち、「コミュニケーション」の典型的なイメージとして、

個人、つまり「確立された主体」が、もう一人の個人と情報を交換し、相互理解をおこなうこと。一般的に、「とても良いこと」であり、「努力すれば可能である」と思われている。コミュニケーションが成立した後も、「確立された主体」には変化が起こらない。

という説明を与え、一方、「インターコース」の典型的なイメージを

個人というものは、「確立された主体」ではなく、常に流動的で、可変的なものである。他者と出会うことによって、日々、新しい自分に生まれ変わる。他者との出会いは常に一回限りのものであり、一度出会ってしまえば、元に戻ることは不可能である。

と定義づけたのである。これらの用語の定義は、立川健二・山田広昭(1990:p.162-168)を元に、筆者が簡略化・補足しつつまとめたものである。日常語として定着している「コミュニケーション」と異なり、哲学関連で用いられる「インターコース」は、ほとんどの受講者にとって馴染みがない言葉であるが、上記の定義に続き、

他者との間に、コミュニケーションは成立しないし、相互理解は不可能である。理解したように思える場合でも、それが誤解でないことを証明することはできない。実際には、お互いが誤解を積み上げているだけである。しかし、仮にそれが誤解であったとしても、他者との出会いに影響されることで、不可逆的な変化が起こる。本当に理解することは不可能でも、「出会い」のインパクトは大きいのである。

という説明を加えることで、二つの対照的な考え方の意味はおおよそ理解できる。その上で「相互理解なんてくそくえ」という述懐に込められた筆者の意図をもういちど問いかければ、彼らの疑問は氷解する。

こういった作業を通して、彼らは「自文化の内側において、書物を通して異文化への理解を深めようとする」と、「ひとりひとりの人間と出会うことによって、常に新しい自分を見出していくこと」の違いに気づくのである。そしてそれは、日本に留学することの意義を再確認することに繋がる。

筆者はここで「動物園に動物はいるか？」という、いささかトリッキーな質問を発

してみた。戸惑いながら「いる」と答える受講者に「動物は大きいか、小さいか」「どんな色か?」「何を食べるか?」と、意地悪な質問を続ける。

このあたりで、受講者たちは質問の意図に気づく。動物園で我々が目にするのは人間によって一方的にカテゴライズされた種々の動物たちであるが、一つ一つの檻に入っているのは個体としての動物であって「動物そのもの」ではない。「動物」という概念は、個体のあり方を捨象して作り出された概念であり、「動物園」という発想は個人をその属性（例えば国民性）によって識別し分類する近代社会の枠組みに沿って成立したものである。このことに気がつけば、彼らが日々出会っているのが「日本人」ではなく個々の人格を持った個人であること、「日本人」という総称が極めて便宜的なものに過ぎないことも納得できるだろう。

同じように、机を並べて勉強しているクラスメートの一人ひとりが、「〇〇人」ではなくて、その構成員の一人に過ぎないことを指摘した上で、この講義におけるテキストの読み進め方を改めて確認する。つまりそれは、書かれていることを自明の事実として受け取るのではなく、書かれていることと個々の受講者の実感との間に違和感が存在することを前提として、書かれている内容を議論の叩き台にしてお互いの読み取り方からお互いについて学び合う、というやり方である。

このことが共通の了解事項となれば、カルチャー・ステレオタイプを扱ったテキストであっても、偏見⁽³⁾を強化させることなく読み解くことが可能になる。

4. 他者からの眼差し

(3)「アジア定住」は、アジア各地で現地に溶け込んで暮らしている日本人をインタビューし、それをモノログ形式で語ったノンフィクションである。語り口調であるため読みやすいというのがこのテキストを選んだ最大の理由であるが、ドミナントな異文化集団の中で生きている個人の心情が吐露されていることから、受講者にとっては親近感を覚える内容であろうと推測できる、というのも一つの狙いであった。前述の「ヤマトンチュからみたオキナワ」とは異なり、マイノリティの側からの描写であり、しかも語り手が日本人である。タイ人の受講者が「他者からの眼差し」をどう受け止め、それをどのように他の受講者とシェアするのか、という点が授業を進行していく際のポイントとなる。

といっても、このテキストにおける記述は、

これこそタイ人気質だということを説明するのは、なかなか難しいんですよ。一筋縄ではいかない人たちですからね。

といった、比較的穏当なものであり、特に議論を招くようなことはなかった。

03年度には、このテキストを読ませた後、自文化の価値観のキーワードを自己申告させるとともに、日本人の価値観のキーワードと思われるものを各自の実感に基づいて書かせるという課題を与えた。そして提出されたキーワードを一覧表にして配付し、多彩な回答があったことをフィードバックした。例えば日本人の価値観のキーワードとして「節約」を挙げた受講者がいる一方で、「奢侈」を挙げた受講者がいた。そのほか、「忠誠」と「自己防衛」、「まじめ」と「誇張」など、互いに相容れないような性質がともに日本人の価値観のキーワードとして挙がっていたことを指摘して、「他者からの眼差し」が恣意的な判断に帰着しやすいことを確認したのである。

5. 偏見にとらわれないために

5-1 偏見が形成されるプロセス

(4)「中国てなもんや商社」では、偏見が形成されるプロセスについて検証することを目的とした。このテキストは、中国の対外開放政策の初期に著者が経験した日中貿易の経験を面白おかしく描いたものであり、日本側と中国側の文化摩擦が題材となっている。著者の意図としては、市場経済と資本主義のシステムに混乱しつつも不屈のバイタリティで日本人を圧倒する中国人たちの逞しさを描いているのであろうが、端々に無知による誤解と偏見への萌芽が含まれている。

例えば、中国の乾杯スタイル（飲み干したあと、グラスを掲げて底を見せる）を描写したあと、

この習慣でお互いちゃんと飲んだかどうか、確認しあっているのだ。毎度ながら人間不信の強い国だという想いが、ちらりと頭をかすめる。

というコメントがつけ加えられる。このような、「悪意がなくても偏見は生まれる」例を、中国からの留学生の反論を織りまぜつつ読み進めたわけである。

このテキストは、あらかじめ「批判的に読む」ことを告げた上で配付した。02年度の受講者七名のうち三名が中国出身者であったこともあり、上記のような記述に対し

ては「それは誤解である」という反論が相次いだ。むしろ「本音と建て前」を使い分ける日本式コミュニケーションの方が人間不信に裏打ちされているように感じる、という主張もあって、テキストを「読まされるのではなく批判的に読む」ことについては、狙い通りの成果が上がったと思われる。

ひととおり議論を尽くしたあとで、講義では「偏見が生まれるプロセス」について整理した。簡単にまとめると、以下のような内容である。

異文化からの視点で捉えると、不可思議に思える現象に遭遇することがある。それが自分に向けられた場合、往々にして理不尽さを感じる。その時、多く人は主観に基づいて強引な解釈を行うことによって、理不尽さをやり過ぎそうとする。その解釈に一定の説得力があれば、理不尽さをやり過ぎることが容易になるからである。その解釈が固着化したもの、伝え聞いて先入観となったものが偏見である。

例として、「割り勘を好む日本人はケチだ」という「結論」に至るプロセスを紹介した。すなわち、

- ① ゼミの先輩と食堂に入った。うれしい。今日はおごってもらえる。
- ② 先輩はレジで自分の食事代だけ払ってさっさと出て行ってしまった。なぜだ？
- ③ 自分は何か失礼なことを言って、先輩を怒らせたのだろうか？（不安）
- ④ 自分が先輩であったなら、仮に明日の自分の食事代がなくても後輩に払わせたりにしないのに。（怒り）
- ⑤ 別の友人に聞いてみると、それは日本の習慣なのだという。理屈では分かるが、自分の感情が傷ついたことは事実だ。
- ⑥ しかし、許そう。ケチな日本人と違って、自分は心の広い人間なのだ。（結論）
といった感情の動きを、架空の場面に沿って追跡したのである。

もちろん、この解釈もまた、「中国や韓国からの留学生ならこう感じるだろう」という先入観の一つに過ぎないことを付言しておいた。

異文化体験においては不可思議さや理不尽さを感じた時に性急な結論を出さずにとどめおいておく努力が必要である。また、「理解した」と思った瞬間に新しい誤解そして偏見が生まれる可能性もある。こういったことは、どんなに強調しても足りないであろう。

乾杯を巡る議論に関して、韓国からの留学生が「もし、授業以外でこの部分を読んでいたら、著者の解説に同意して中国は人間不信の強い国だ」という印象を持ったかもしれないが、反論があったおかげで、そういうのは一方的な見方に過ぎないと気づい

た」と述懐していた。この受講者は、このテキストを読んだ感想として、提出物の余白に「誤解というのはより深い理解のための一つの過程だと思います。異文化に対してすぐ持ちがちな先入観について、その国の人から直接説明が聞けてよかった」と書き込んでいた。

5-2 「偏見」を扱うことの困難さ

このテキストは、差別的とまでは言わないまでも偏見の萌芽が垣間見えるために、取り扱うに当たっては配慮の上に配慮を重ね、受講者に不愉快な思いをさせないように気を使った。歴史的な背景を説明して日中双方にとって試行錯誤の時期であったことを強調し、あくまでも日中貿易の過渡期のある一面を滑稽にデフォルメした物語であることを繰り返し語った。映画化された「中国てなもんや商社」のビデオの最後の場面---神経質なまでに厳しい日本側の品質管理要求を満たして胸を張る労働者の姿---を見せて、日本で売られている衣料品の多くが中国製である現状を語ったりもした。

02年度前期の三人の中国人受講者のうち、やや年長の二人は対外開放政策が始まったばかりの頃の混乱や文化摩擦について知識を持っていたこともあり、「この著者は誤解している」という批判はあってもこのテキストを取り上げたこと自体については冷静に受け止めてくれた。しかし、残りの一人はどうしても納得がいかなかったようで、課題の答案に「中国について悪いイメージを与えるようなテキストを選んだ理由がわからない」という抗議を書き添えてきた。この受講者とは、授業外の時間に話し合いの場を設け、授業でこのテキストを扱った真意を納得してもらえたが、受講者に不必要な不快感を与える教材は避けるべきであったと反省した。

この経験を踏まえて、03年度には上記テキストに代えて「化粧するアジア---華都市の消費事情」を教材として選んだ。その理由の一つは、中国という広大な国家を扱っているのではなく、上海という都市を香港、台北、シンガポールと並列して扱っていることである（この学期は受講生の中に台北やシンガポール出身の学生もいたので好都合であった）。つけ加えると著者は日本在住の韓国人であり、日本を相対化する視点で各都市の消費事情を記述している。聞き書きや断片的な印象が多く、分析に深みが足りないという点が物足りないが、少なくとも「中国てなもんや商社」よりは客観的で中立的であると言える。

このテキストにも誤解が偏見を招くというプロセスが見られ、講義では「批判しつつ読む」ことに重点を置いた。現地を知る受講者の反論や違和感をクラスで共有し、

一般の書物で語られているイメージは一面的であることが多いことを実感してもらった。例えば、ぼろぼろになった紙幣をなかなか受け取ろうとしなかったウェイトレスのエピソードに対して、中国の留学生から、その当時偽札が横行していたことを指摘して、「中国人相手の交渉は強気に出た方が勝ちだと結論づける前に当時の現地の状況を理解すべきだった」という反論が寄せられた。産休もとらずバリバリ働く台湾女性の強さを賞賛するくだりに対しては、台湾からの受講者が「少なくとも私の知っている範囲ではそんな話はない」と反論した。

受講者からの反論に対しては、どちらの意見が正しいのか、筆者には検証するすべがないことを認めた上で「書いてあることを鵜呑みにしない」、「自分の見聞きしたことが普遍性を持つとは限らないから、結論を急ぐべきではない」、「テキストに書いてあった意見と現地を知る人の意見のギャップをそのまま心にとどめ、今後、一面的なものの見方と出会った時に思い出してほしい」というふうにコメントした。誤解を偏見として固着させないための最低限の心得としてつけ加えた次第である。

6. 近代的自我の形成

(5)「カルティニの風景」は、他のテキストに比べると使われている語彙の難易度が高く、内容も専門的である。カルティニとは、19世紀末に生まれ20世紀初頭に若くして亡くなったインドネシアの女性である。講義では彼女の評伝の部分を抜き出して読んだ。

カルティニはインドネシアでは紙幣の肖像になるほど有名だが、当時の現地社会の慣習に従って親の決めた相手に嫁ぐまで家庭内に閉居させられ、社会的な活動にはほとんど参与していない。オランダ人女性に宛てたオランダ語の手紙が書簡集として出版され、その文才が高く評価されていることが、彼女が国民的なヒロインとして紹介される所以である。

したがって、なぜこの女性の評伝をテキストとして選んだのか、背景説明が必要であった。まず、インドネシア人の受講生にカルティニの略歴を紹介させ、彼女が紙幣の肖像になった理由を受講生全員に考えさせた。受講生の国や日本ではどんな人が紙幣の肖像になっているか、という切り口から議論を誘導したところ、「国の統一や近代化に貢献した人」という共通性があることが分かった。これについては、夏目漱石の生きた時代や夏目に代表される国民文学の成立が国民意識の形成に寄与したプロセスを紹介し、中国の魯迅やタイのラーマ五世が、カルティニや夏目漱石と同じ時代に

それぞれの国において同じ役割を果たしていることを指摘し、さらには、「近代社会をつくる」ということがアジア諸国にとってこれら先達の時代以来の課題であったことを確認した。同時に、これら先達がいずれも国外との接触において活躍の発端を見出したことも指摘した。

このような議論を前提として、カルティニがどのようにしてインドネシアの近代化に貢献したか、という点を解説しつつ、テキストを読み進めた。テキストには、彼女の生い立ちと当時の慣習を紹介した後に、彼女の聡明さと向学心がいきいきと描かれた書簡の一部が紹介されている。この書簡は、彼女が慣習に従って閉居したのち、その出来事を振り返って書かれたものであり、原文のオランダ語が日本語に翻訳されている。

注目すべきは、この文章が三人称で描かれていることである。「私」を他者として発見すること自体が近代的な作法の一つであり、自らの所属する社会を他者の視点から描くことが近代的な文学の特徴であるとすれば、彼女の書簡はインドネシアにおける近代文学の先駆けであると言っても差し支えない。

学校で学んだオランダ語で自らの心情を描写し、閉ざされた空間で空想の翼を広げてオランダと対置された「祖国」を美しく思い描くカルティニは、インドネシアにおける近代的自我形成のモデルパターンとなった。彼女がオランダに対置する祖国のイメージとして記した「赤道を取り巻くエメラルドの帯」という呼称は今でもインドネシアを形容する定型句として用いられ、民族意識のよすがとなっている。

そういった事実を織りまぜつつテキストを読み進めて、彼女の存在がインドネシアだけの現象ではなく、近代化を押し進めていくプロセスで新しい意識（近代的自我）を切り開いていった先達の一人と位置づけることができた。受講生たちは、カルティニの思考の軌跡を追うことで、彼女が果たせなかった「留学」という機会の持つ意義を再認識し、その夢を叶えている自分達の境遇を励みとしたようである。

7. オキナワン・アイデンティティ

03年度は、インドネシア出身の受講生がおらず、オキナワ系ペルー人の県費留学生が受講していたため、「カルティニの風景」に代えて「ペルー日系人の二十世紀」及び「大阪ウチナンチュ」をテキストとして選んだ。このテキストを選んだのは「ヤマトンチュから見たオキナワ」を読む際に触れた「ウチナンチュ」という概念に対して、非常に高い関心が寄せられたことを受けて、オキナワン・アイデンティティに

ついて更に深く理解してもらおうという意図があつてのことである。

沖縄では、日系人という言葉とは別に、県出身の日系人に対して「県系人」という呼称が新聞等で用いられる。県系人は30万人を越え、海外在住日系人のうち13%を占めている。沖縄県の人口が日本の総人口の1%前後であることを考えると、この数字がいかに特異であるか、理解できよう。⁽⁴⁾

また、「ウチナーンチュ」という言葉は居住地や国籍は問わないし、ヨーロッパ系やアフリカ系等の親族を持つことによって外見的にアジア人らしく見えないケースでも適用される。日系人を日本人というカテゴリーから排除しがちな「内地」の事情とは大きく異なっているのである。

このテキストを講読するに当たっては、沖縄の人々のアイデンティティ形成のあり方が内地と異なっていることを例を引いて紹介し、県外に住む「在外ウチナーンチュ」には大阪等内地に住む二世、三世の人々も含まれることを予め指摘した。多くの受講生がこういった事情に強い関心を見せたため、当初予定していなかったテキスト「大阪ウチナーンチュ」の前書き部分---在日朝鮮人の多く住む猪飼野（大阪市生野区）と、沖縄からの移住者が多く住み今も沖縄文化を伝えている大阪市大正区の類似性を指摘した箇所---も講読することにした。

さらに、日本における民族問題を語る上で避けて通れないのが「オキナワ」「在日コリアン」「アイヌ民族」であることを指摘し、アイヌ民族に関する歴史的経緯や現状等を理解するための資料を回覧させたりもした。残念ながら、筆者にはアイヌ民族に関する知識も個人的経験もないため、ごくごく控えめな一般論を語ったに過ぎず、受講生たちの知的欲求にじゅうぶんに答えることはできなかった。⁽⁵⁾

講義では、これらテキストを読み終えたあとで「もし、あなたが移民として国を離れたなら、自文化のうちのどのような部分を次の世代（二世、三世）に伝えたいか？」という課題を与えて、その回答をまとめたものを配付する形でフィードバックした。

留学というかたちで異文化の中に身を置く受講者たちにとって、自ら国境を越えて異文化の中で生き抜いてきた人々の経験から学ぶことが多かったようである。ボーダーレス化が進み、英語による情報の一元化が予測される時代にあつては、自分達が次の世代に何を継承することを望むのか、という問いかけから目を背けて「伝統」に埋没することはとうてい不可能であり、日常生活において異文化が隣接する中で自己形成することが一般的な傾向となるであろう。そのような時代を先取りするケース・スタディーと言えるかもしれない、という認識で、この課題に取り組ませた次第である。

8. 近代的都市生活における恋愛事情

02年度も03年度も、前期の締めくくりとして選んだテキストは短編小説「縁切り神社」であった⁽⁶⁾。この短編小説では、近代的な都会に生きる人々のメンタリティを通して、近代的自我のありようを解説した。

物語は、旅先で過去の恋愛を振り返る女性の心理状態をリアルに描き、「恋愛に依存しないことの強さ」が「心を許すことによって傷つくことを恐れる弱さ」へと反転していくプロセスを丹念に辿っている。

このテキストを読み進めるに当たっては、近代社会が個人という単位に基づいて形成されている以上、その成員は孤独から逃れることが困難であり、その孤独を束の間癒してくれるもっとも普遍性の高い手段として「恋愛」がもてはやされるようになる、といった事情を説明した。

近代社会への過渡期においては、恋愛というものは特権的な価値を有しており、「家族を典型とする共同体」と「個人」との相克を描く（この場合、恋愛はしばしば個人としての自立とセットで扱われる）物語が好まれるものであるが、それに対し、近代化を終えた社会では個人が主体的に行動することが前提となる。

この小説の主人公は「都会に暮らす普通の女性」という設定であり、個性的な背景を持たないという点では他の登場人物も同様である。主人公の元カレは「一つ年下で」「ガタイが大きく」「食品会社に勤務している、ごくごく普通の男」というふうに外的属性だけで描かれ、主人公にとって特化された存在でないことを窺わせる。主人公は失った恋に関して自らの正当性のみを固執し続ける。彼女にとっては、恋愛とは自尊心を保つための手段でしかなく、「自我」という殻を突き破って内面を揺さぶるようなものではなかった。ところが、ふと迷い込んだ神社で見つけた一枚の絵馬が、頑なだった彼女の自我を溶解させ、自らの傲慢さを思い知らせることになる。それは、神社という場---「念」や「縁」という、見えない力が働く異界---の果たしてきた役割の再認識にもつながる。「理」と「知」で押さえ込むことのできない感情が解き放たれ、癒しと再生のきっかけを与える装置が、極めて非近代的な場であったことは偶然ではない。

この物語は、都市生活を知るものには極めて理解しやすい感情の流れを描きつつ、都市的な装置では回収しにくい「祈り」や「怨念」というメンタリティを、神社や絵馬という伝統的な装置を通じて解き放っている。

このテキストを通して「近代的自我」の持つ危うさを確認したあと、後期の「日本

語VI」では近代人の内面世界に更に深く切り込んでいくことになるが、その先の展開については次の機会に譲ることとする。

9. まとめ

難波（2003）では、異文化適応支援のありかたを「知識注入型」と「相互干渉型」に分類した上で、前者について

根底に流れているのは、ある複数の人間の接触においてそこに「異文化」が存在した場合、その「異文化」を「日本人vs〇〇人」（はなはだしくは「日本人vs外国人」）という属性の違いに起因するものとする考え方である。

と述べ、それは

「異文化」を強調し、拡大再生産することに寄与こそすれ、問題解決に直結するとは考えにくい。

と主張している。

小論で提示した講読の流れは、このようなアポリアを回避しつつ、異文化を理解することによって世界観が広がり、異文化に対して柔軟な理解ができるように配慮したものである。日本人向けに書かれた文章であるにもかかわらず、授業終了時のアンケートで「わかりやすかった」という感想が多かったのは、問題意識を自分の体験に引き寄せて読むことができた結果であろうと推測する。

註

- (1) 倉地（1998：p.11）は、国籍や帰属する民族やエスニシティによる違いを一元的、静態的なものとしてとらえ、その違いによって自己の帰属する集団から区別される民族・エスニック集団の特性を均一的にとらえ、おしなべて異質である（中略）とする考え方には当然限界がある、と指摘している
- (2) 沖縄では、県出身者を「ウチナーンチュ」と呼び、日本本土出身者「ヤマトンチュ」と区別する。
- (3) 小論では、「偏見」を「特定の社会集団やその成員に対して、柔軟性のない一般化

によって付与される、誤解に基づいた反感」と定義づけておく。

- (4) 「第3回世界のウチナンチュ大会報告書」による。
- (5) ウチナンチュ二世、三世や在日コリアン、アイヌ民族のアイデンティティのあり方を巡る議論は、もっと掘り下げる価値があると思われる。今後の課題としたい。
- (6) 03年度は「ドイツの不便、日本の便利」も講読したが、これについては紙幅の都合で割愛する。

参考文献

- オルポート C.W. (1968) 『偏見の心理』 培風社
- 川端美樹 (1995) 「自文化中心主義と偏見」『異文化接触の心理学 その現状と理論』
渡辺文夫編 川島書店
- 倉地暁美 (1998) 『多文化共生の教育』 勁草書房
- 第3回世界のウチナンチュ大会実行委員会 (2002) 『第3回世界のウチナンチュ大会報告書』
- 立川健二・山田広昭 (1990) 『現代言語論』 新曜社
- 難波康治 (2003) 『教員研修留学生の日本語習得と学習環境の関係についての基礎的研究』(科学研究費補助金基盤研究(C)(2)課題番号13680356)
- 米本昌平 (1996) 「科学の言説と差別」『差別の社会理論』 栗原彬編 弘文堂

教材の出典

- 上野千鶴子 (2001) 「ヤマトンチュから見たオキナワ」『沖縄的人生』 光文社, 13-27
- 鷺沢萌 (1997) 『ケナリも花、サクラも花』 新潮文庫, 148-154
- 野村進 (1996) 『アジア定住』 めこん社, 64-65
- 谷崎光 (1996) 『中国てなもんや商社』 文芸春秋, 7-20
- 土屋健治 (1991) 『カルティニの風景』 めこん社, 39-45, 69-73 (抜粋して使用)
- 田口ランディ (2001) 『縁切り神社』 幻冬社, 84-99
- 呉善花 (1996) 『化粧するアジア---華人都市の消費事情』 三交社, 44-50, 119-123, 218-222
- 柳田利夫 (1999) 『ペルー日系人の二十世紀』 芙蓉書房出版, 36-37
- 太田順一 (1996) 『大阪ウチナンチュ』 ブレーンセンター, 2-3

上野千鶴子（1991）「ドイツの不便、日本の便利」『朝日ジャーナル11月29日号』，
30-31

（琉球大学留学生センター）

Improving Crosscultural Understanding through Reading Strategies (1)

ISHIHARA, Yoshihito

Keyword : crosscultural understanding, intercourse,
supporting adaptation through interaction

Abstract

In advanced Japanese reading classes composed of students with various cultural backgrounds and aims, textbooks dealing with "Japanese culture" are often used. Using such textbooks, however, always entails the risk of compelling students to be culturally assimilated. This risk should be always born in mind in teaching Japanese reading via textbooks dealing with "Japanese culture."

This study has suggested how to teach learners of the Japanese language reading strategies to understand cultural diversities through texts and to evaluate different cultures critically and flexibly. Such reading strategies make our students studying at University of the Ryukyus aware of the significance of learning in Okinawa by bringing them to recognize the gap between Okinawan and standardized Japanese cultures. Furthermore, such reading strategies enable students to critically read texts written on the standardized cultures of their own.

Reading the passages with such contents gives learners an opportunity to reflect their own experiences and to verbalize them in Japanese. This means that, even in the case of reading materials with high difficulty, learners can tackle the materials with great interest, and that they can understand them more easily.

(University of the Ryukyus)